

【シルニース調査レポート】

株式会社野村総合研究所

高齢期の経済格差と「相続」のリアル

～データで見える、親からのバトンとその後の暮らし～

1. はじめに

親から子へ、世代を超えて受け継がれる資産としての「相続」。人生の重要な節目となる出来事ですが、その経験は決して一様ではありません。本レポートでは、NRI 社会情報システム株式会社の独自調査基盤「シルニースパネル」のデータを基に、高齢者の相続経験の有無やその内容が、現在の経済状況や将来の暮らし向きに対する意識とどのように結びついているのか、その実態を報告します。

2. 調査概要

- ・ 調査対象：シルニースパネル（シルバー人材センター会員）
- ・ 分析対象数：983 名
- ・ 調査内容：相続経験の有無、相続資産の内容、家計状況、金融資産額、将来への展望など

3. 調査結果サマリー ① 相続経験の濃淡：男女・年代で異なる姿

高齢者における相続経験の有無を調査した結果、属性によって大きな偏りが見られました。

- ・ 全体傾向：「相続した（42.9%）」と「いずれ相続する予定（3.6%）」を合わせると、

半数近くが相続に関与しています。

- ・ **男女差：** 男性全体の相続経験率（親他界・生前贈与）が 48.9%であるのに対し、女性全体

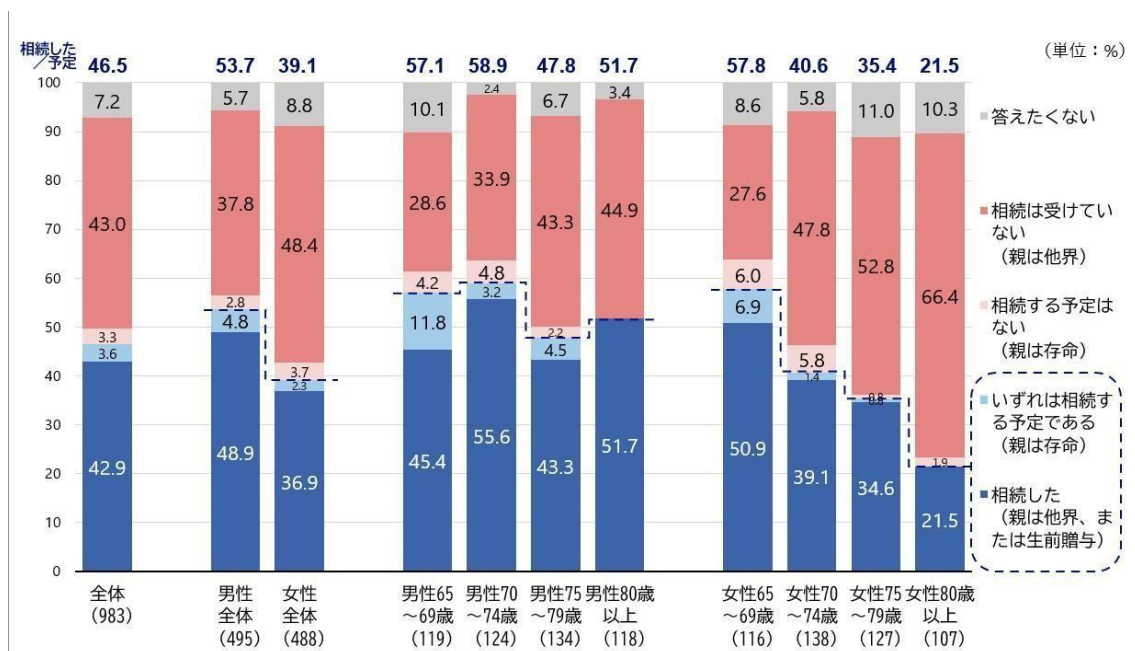
では 36.9%と、10 ポイント以上の差があります。

- ・ **80 歳以上女性の特徴：** 「相続は受けていない（親は他界）」との回答が 66.4%と突出

して高く、同年代の男性と比較しても顕著な差が見られます。社会的背景等の影

響により、相続の機会に恵まれにくかった世代であることが示唆されます。

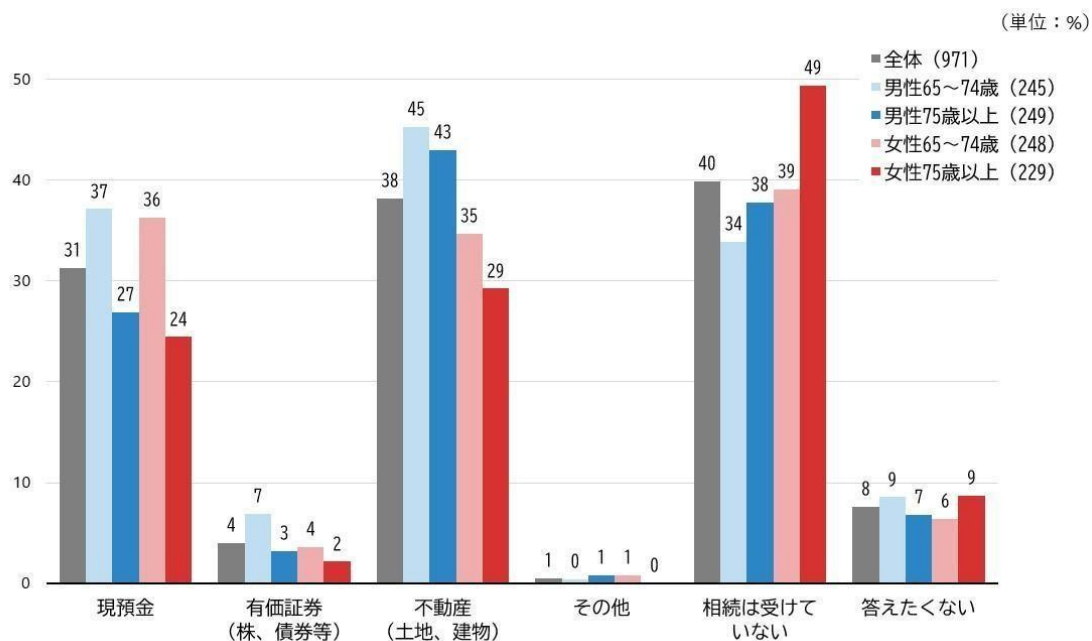
図 1 自分や配偶者の親や親族から相続を受けたか（男女・年代別）



- ② **相続資産の内容：不動産が中心** 具体的に何を相続したか（複数回答）については、日本の家計資産の特徴が反映された結果となりました。

- ・ **資産の内訳：**「不動産（土地、建物）」が 38.2%で最多、次いで「現預金」が 31.3%でした。
- ・ **属性による違い：**男性 65～74 歳では「不動産」の割合が 45.3%と高い一方、女性 75 歳以上では 29.3%に留まるなど、性別や世代によって継承する資産の内容や規模に差異が見られます。

図 2 相続を受けたものは何か（複数回答、男女年代別）



③ 家計の余裕と相続の相関

現在の家計状況や生活レベルの自己評価と、相続経験には強い相関関係が見られました。

- ・ **家計のゆとり度別：**「余裕があり、将来の心配もない」層では相続経験あり（予定含む）が 66.2%に達します。一方、「余裕はなく、やりくりが厳しい」層では 33.9%、「大変厳しい」層では 22.6%まで低下します。

- ・ 生活の程度（自己評価）別： 世間一般から見て「上」と回答した層は 80.0%が相続

を経験（または予定）しているのに対し、「下」と回答した層では 18.4%に留まりました。

- ・ 親世代からの資産継承： これらのデータは、親世代からの資産継承が子世代の経済格差に直結している現実（いわゆる「親ガチャ」の側面）を浮き彫りにしています。

図 3 自分や配偶者の親や親族から相続を受けたか（家計状況別）

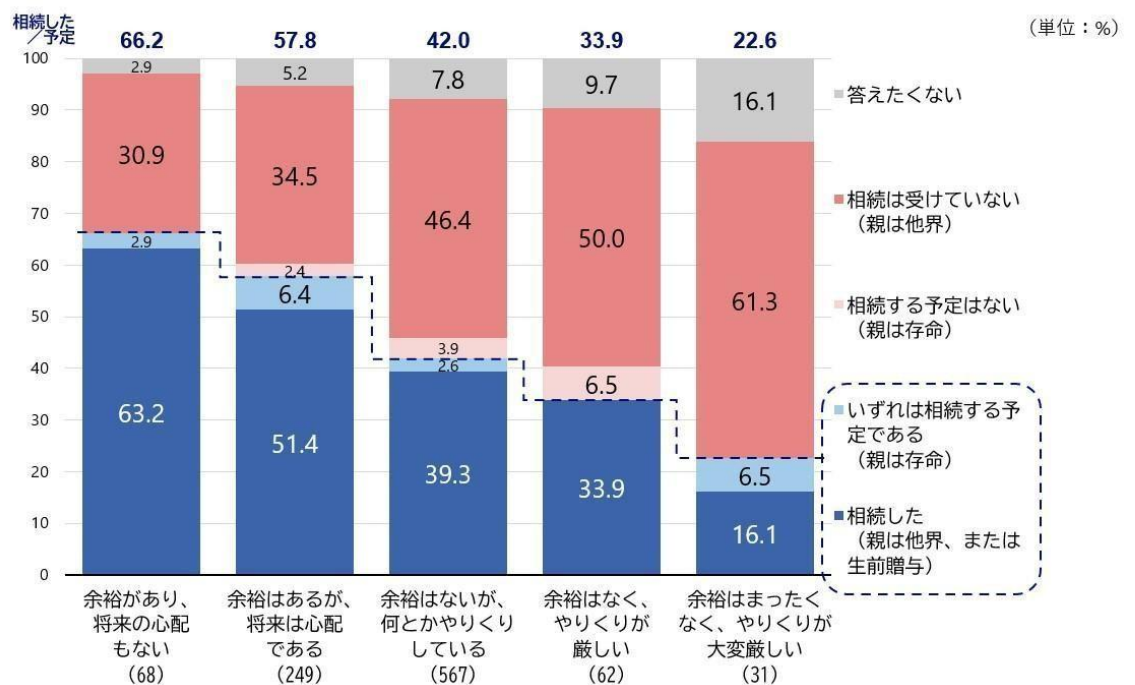
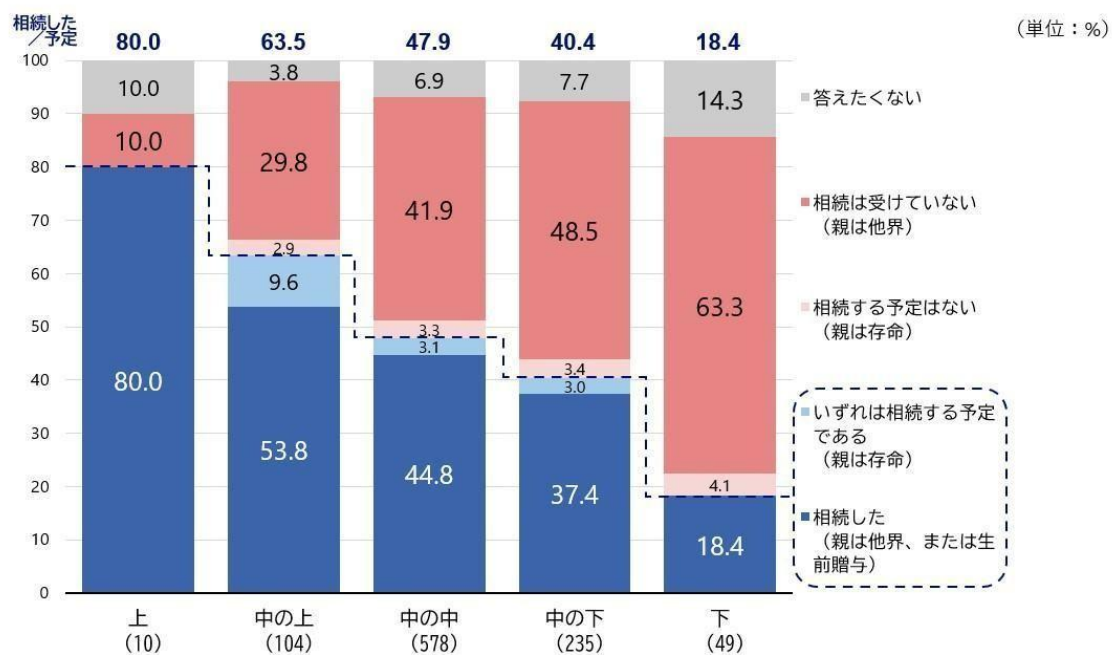


図 4 自分や配偶者の親や親族から相続を受けたか（世間一般からみた生活の程度別）

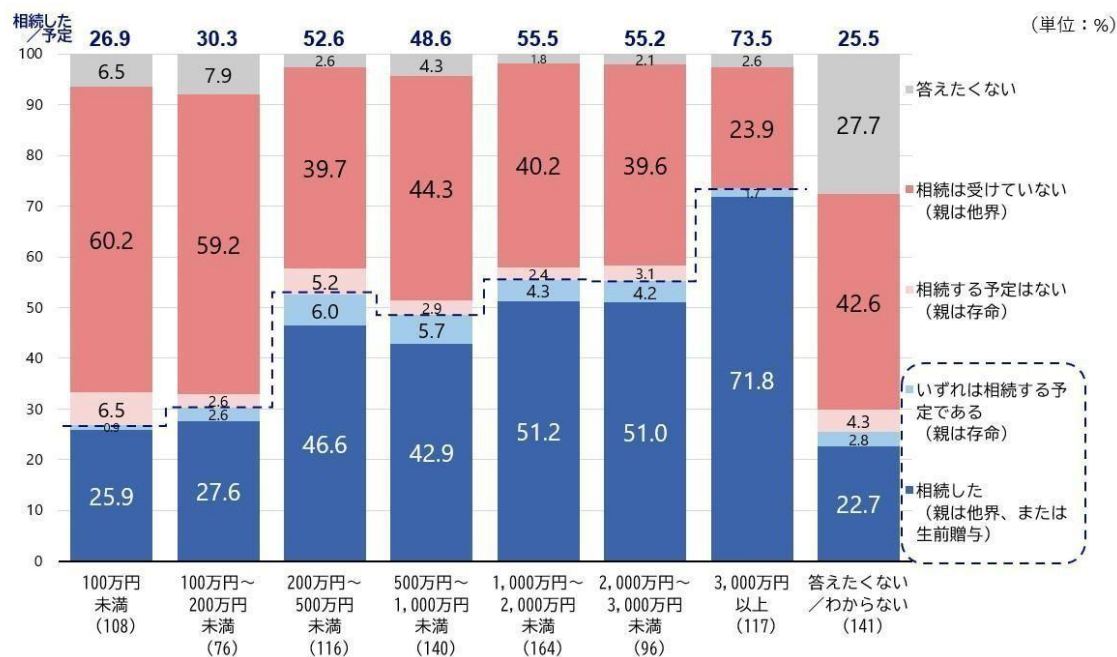


④ 金融資産額と相続経験

保有する金融資産額（貯蓄額）の多寡も、相続経験と比例しています。

- ・ 3,000 万円以上保有層： 73.5%が相続を経験（または予定）しています。
- ・ 100 万円未満保有層： 相続経験（または予定）は 26.9%に留まります。
- ・ 資産額が 1,000 万円を超えると相続経験率は 55%前後となり、一定以上の資産形成層において相続は一般的な経験となっています。

図 5 自分や配偶者の親や親族から相続を受けたか（金融資産額別）

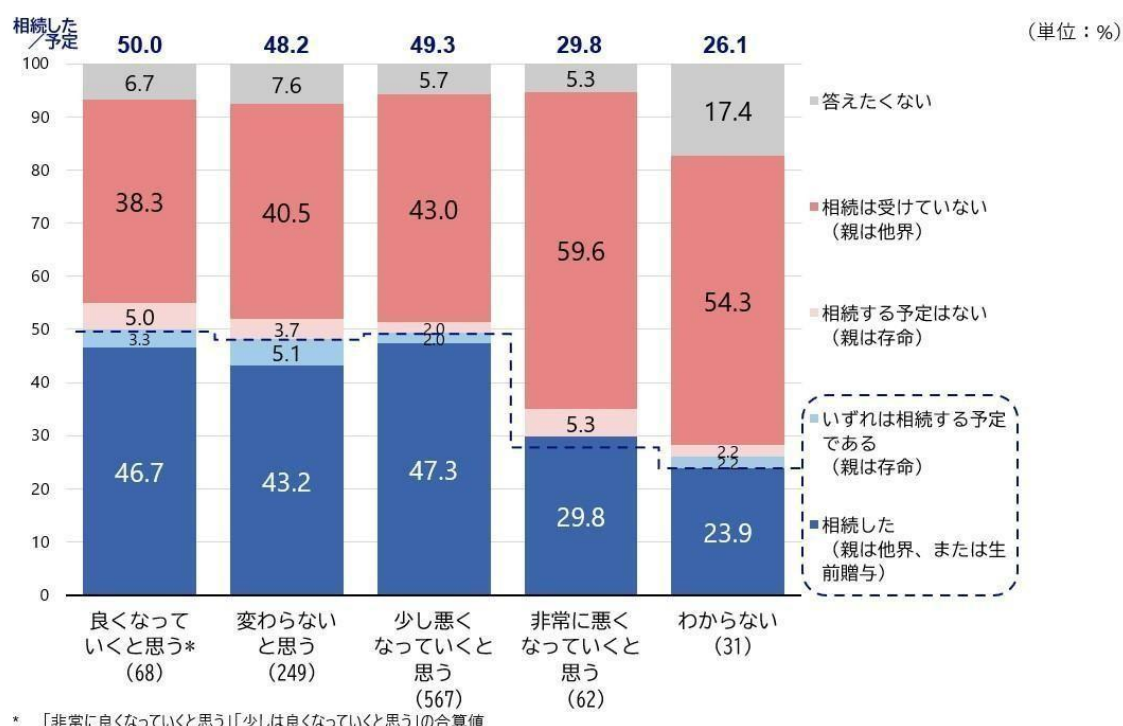


⑤ 相続と将来への展望 相続による資産の有無は、必ずしも将来への楽観的な見通しだけを

もたらすわけではありません。

- ・ **楽観層の相続率：** 今後の暮らしが「良くなっていくと思う」層では、半数の50.0%が相続を経験（または予定）しています。
- ・ **悲観層の相続率：** 「非常に悪くなっていくと思う」層においても、約3割（29.8%）は相続を経験しています。
- ・ **資産と不安の関係：** 不動産の維持管理コストやインフレ、健康・介護問題など、金銭だけでは解決できない要因があるため、「相続＝将来安泰」という単純な図式にはならない実態が明らかになりました。

図 6 自分や配偶者の親や親族から相続を受けたか（今後の暮らし向きに対する考え別）



4. 結論

今回の調査データから、相続は経済的な恩恵をもたらす一方で、その経験は個人の属性によって大きく異なり、世代を超えた資産格差の要因となっていることが確認できました。また、相続経験者であっても将来不安を抱える層が一定数存在することから、高齢者の生活実態を捉える際には、単なる資産の有無だけでなく、相続の背景や心理的な影響（維持管理の負担感や将来不安など）を多角的に理解することが重要です。

本資料に関するお問い合わせ：
 株式会社野村総合研究所 社会情報システム事業部
 シルニアス担当 sirniors@nri.co.jp